

「神様に流される人生」

Iヨハネ 1:1~3

■ 神様はあきらめない

私達は往々にして自分の生きる道が正しいと思い生きていく中で、その道がうまくいかないときあきらめてしまいます。しかし、聖書の土台にあるのはあきらめないことです。神様はあきらめないお方です。

■ 神様の流れに身を任せていく人生

キリスト自身がこの地に来た理由はただ一つです。「キリストは神の御姿である方なのに、神のあり方を捨てられないとは考えず、ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられました。人としての性質をもって現れ、自分を卑しくし、死にまでも従い、実に十字架の死にまでも従われました。」(ピリピ 2:6-) というこの生き様を見せに來られました。クリスチャンとはキリストの生き様を生きること、そして自らの生き様を次の生き様に伝えることです。それが History。彼の歴史をもう一度私達が継承して繋いでいく歴史です。けれど、その中であって私達はいつも自分の流れを作ろうと考えます。たとえ川が流れていても自分はそこで逆行したいのです。なぜかという「我」がいるからです。

神によって流された人生だと思っていなければ、過去を振り返って見たときに嬉しかったことよりも悲しみや痛みや記憶が出てきます。ですからヨハネは、創世記 1:1 からもう一度見てみると、そして自分自身の見たイエス・キリストはこうだったのだということを私達に伝えたかったのです。神様は私達の人生において私達が神様の計画に流れるのだということを知らせようとしています。なぜかというキリストの生き様が神の流れに従った生き方だからです。大工の息子に生まれ、生まれて三年間は放浪の旅… 33歳で十字架にかかるまで痛みの中で生きた生涯に自らの意思があったのでしょうか。「私が天から下って来たのは、自分のところを行くためではなく、わたしをお遣わしになった方のみところを行うためです。」(ヨハネ 6:38) ということがすべてでした。クリスマスのストーリー。私達にとっては確かに恵みです。けれど、キリストにとっては自己を捨てるという葛藤でしかありません。

■ クリスチャンの生き方 魂を静め、知恵を聴く 神様の流れの中に生きることを知る

「渾然一体」というテーマが与えられた今年もあと一ヶ月となりました。神様の心と一つになっているのでしょうか。「主はその御目をもってあまねく全地を見渡し、その心がお自分と全く一つになっている人々に御力をあらわしてください。」(II歴代誌 16:9) 一つとなるために私たちは神様の流れに生かされているということを知る記憶をもつ必要があります。過去が私達の人生を支配しているものではありません。過去は私達の人生を良くするための土台です。「神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてください。私達は知っています。」(ローマ 8:28) 「私たちは」知っているのだとローマ書でも学びました。はじめの日から今日に至るまでそのすべてが神に戻るようにセットされているということなのです。その中で、川の流れに逆らって泳いで自らで滅びを招く人生か、その流れの中で抗わずに海まで辿り着く人生のどちらを生きるのかを「私達が」決断するというのです。

■ クリスマスは神の流れに委ねた人のストーリー！

マリヤにとってクリスマスは苦しみでしかありませんでした。愛する人との結婚が破談になる可能性が、公然に死刑にあうかもしれない、家族からは離れ離れにならなければならない…。これまで描いてきた幸せ像とはまったく真逆の人生でした。ヨセフにとっても、両親にとってもそうでしょう。しかし、それを「委ねた」ということに意味があります。

■ 家畜小屋の人生を認めて光を！！

近年、日本では依存症と言われる人達が増えています。その依存症の施設ではカウンセリングのなかで、必ず子どものころ何があったかということを知り、そして依存症になってしまったきっかけを見つけ、そこに向き合います。そして「そのとき神様がいたとしたら、あなたに何と伝えてくれたか」ということを質問し、神様がどう語ったかを紙に書くそうです。

そして毎日、その過去と向き合い、神様の慰めの声を聞く作業を繰り返し、段々と依存症から回復していくそうです。私達は本当の神様を知っています。本当の神様が慰めてくださる本当の声を聞くことができるのです。私達にも辛かった過去、痛みのある過去があるでしょう。その過去によって自分をコントロールできないほど感情が高まることがあるでしょう。けれど、その過去にイエス・キリストの光を灯してその過去を見るならイエス・キリストに流された人生であったことを知るのです。私達のその過去は通ることを許されたのでそうならただけなのです。

■ 交わりのある人生へ！！ Iヨハネ 1:3

ヨハネはなぜ、「光よあれ」の話から突然「交わり」に話を交えていったのでしょうか。「このすべての王たちは連合して、シディムの谷、すなわち、今の塩の海に進んだ。」(創世記 14:3) この「進んだ」が「交わり」の意味です。また、この箇所は、アブラハムがまだアブラムだった時、甥のロトと別れて後、ロトの住んでいた場所(後のソドムとゴモラ)にソドムの王や色々な王たちが結託して盗みに入る記事ですが、この「結託」を指します。そして、この交わりの言葉の意味はハーヴェル(戦い)を指し示しています。つまり、共に進み共に戦うため「連合する、交わり」という意味なのです。私達は交わりといえれば楽しいイメージを思い浮かべますが、聖書でいう交わりというのは戦いに向かって進んでいく様なのです。私達はいつも「個」になることを選んでしまいます。けれど、一人で何かをするとうまくいかないということをいつも覚えておかなければなりません。そこで、神様は「交われ」と言われました。では、「交わり」とはいったい何なのでしょう。私達の戦いは過去との戦いです。過去はアダムとエバが罪を犯したその日から悪魔に奪われました。人が生きる道はいつも悪に誘惑されて道はずれていくのですから…。ところが、この奪われた過去をイエス・キリストは十字架で勝ち取りました。十字架で勝ち取る方法が何なのかというと、いっさいの過去に基づく誘惑に負けずに戦う人生。つまり「流れる」ということです。では、流れて行くのに戦うとはどういうことでしょうか。私達は流れていることが不安なのです。神様があなたを置いている環境にすることが不安なのです。そこで交わりが必要なのです。先に生きた人が神に流された時に大海原にたどり着いたことを伝えるのが証しです。イエス・キリストが流されて十字架にかかって天に帰ったという証しを知っている私達が「聞いたもの、目を見たもの、じっと見、また手でさわったもの」を自分の人生に置き換え、そこで起こったことを通して流されて大丈夫なんだということを知ることなのです。ですから、クリスマスはあなたがあなたに死ぬ時です。流れていることを不安になって一人でバタバタ戦うのをやめる時です。

さいごに

神さまのなさることは糞土にまみれた私たちの暗闇の過去の洞窟に入って、光を灯してきよめようとする神の力です。もう一度あなたの過去をイエス様の光に照らしてその心を神様にきよめてもらいましょう。そのとき、あなたの暗闇の過去が人生の揺るがない土台となっていきます。神様は人の愚かさをご自分の栄光に変えていかれるお方だからです。神さまは十字架にかかり、すべての痛みと呪いを引き受けて下さったくらいに私達を愛し、御霊に流される人生になることを願っておられます。問題、失望、思い通りにいかない…その時にこそ信仰の真価が問われます。神は交われといわれています。間違った道を選ぼうとする時、交わりをもって戦おうしてくれる神の家族の存在はなんと素晴らしいことでしょうか。痛むために過去を振り返るのをやめることは大切です。けれど、過去をしっかりと見てそこに光を灯してもらい必要があります。どうしてもやめられない罪、赦せない心、憎しみ、自己否定、…そんな私の人生の過去がなぜ起こったのかを思い起こしましょう。そして神様が与えられようとしておられるその助けに手をのばすことができますように願って祈っていきましょう。過去の痛みにもう一度神様のことを灯していただきましょう。

(要約者:全本みどり)

(2020年11月29日)